＝紀行文＝

内蒙古自治区中南部城址視察記
――フフホト市・包頭市を中心に――

水間大輔
柿沼陽平

二〇一二年八月三一日～九月六日、水間大輔・柿沼陽平の両名は、中国内蒙古自治区中南部のフフホト（呼和浩特）市・包頭市などに点在する戦国～北魏の城址の視察を行った。当地は戦国中期に趙国が林胡・楼煩などを駆逐して進出し、長城や城邑を設けて北辺防衛の拠点とした地域である。秦・漢では雲中郡・定襄郡が置かれたが、たびたび匈奴の攻撃を受けた。魏晉期には鮮卑の拓跋部がこの地に進出し、北魏では国都が置かれたこともあった。当地は、少なくとも戦国～北魏ではさまざまな勢力あるいは民族が交錯する重要な地域であったといえよう。今回の視察の主たる目的は、戦国～北魏の当地に関する先行研究を踏まえたうえで、各城址の位置・規模・構造・残存状況やその周辺の地勢などを実見し、戦国～北魏の当地に関する史料を収集することにある。

今日までに行われた調査によると、当地では実に多くの城址が発見されている。しかし、近年では当地の経済発展が著しく、城址の破壊が進行しつつある。[1] それゆえ、今回視察の対象としたのは、現在でもなお遺構が比較的明確に残っていると思われる城址のみに限定した。

フフホト編（八月三一日～九月三日）は水間、包頭編（九月四日～六日）は柿沼が執筆した。なお、本稿で示した遺址の位置（緯度・経度・海抜）は、「グーグルアース」上で衛星写真を目視することによってえられたものであって、現地でGPSを用いて実測したものではない。前稿でも述べた通り、二〇〇七年以降、中国で外国人がGPSを使用することが事実上禁止されたためである。[2] 本稿末尾には城址の位置を示した地図を付したので、適宜参照されたい。

八月三一日（金）

水間は厦門にて九時五〇分発一四時二〇分着の厦門航空MF八一八九便、柿沼は北京にて一二時四〇分発一四時着の中国国際航空CA一一一五便に搭乗し、フフホト白塔空港へ到着した。フフホト市内の東華酒店で合流し、宿泊した。

九月一日（土）

今日は雨が朝から一日中降り続き、肌寒かった。

朝食後、タクシーで内蒙古博物院へ行き、展示されている文物などを見学した。トクト（托克托）県の古城村城址（後述）で出土した北魏太和八年鎏金銅仏像も展示されていた。

見学後、博物院の前で運転手と合流し、四輪駆動車に乗った。当初の計画では、本日はフフホト市東隣の卓資県、翌日はフフホト市南部のホリンゴル（和林格爾）県へ向かう予定であった。しかし、運転手によると、卓資県への道は悪路であり、雨も降り続いているので、本日と翌日の日程を入れ替えた方がよいとのことであった。よって、本日はホリンゴル県へ向かうことにした。

ホリンゴル県への道中では車がスリップして左右に振られたり、大きな水溜りの中に飛び込むこともあった。途中から舗装がところどころ禿げた道となり、車に乗っている我々が振動によって跳ね上げられることもあった。道すがら数多くのトラックが走っているのを見かけた。主に石炭を輸送しているトラックらしい。今回の調査ではたびたび数多くのトラックを見かけた。

一五時頃、新店子郷楡林城村に到着した。村内では漢代と明代の城址が発見されている。これまで行われた調査によると、その概況は以下の通りである。[3] すなわち、漢代の城址はもともと南北三〇〇メートル、東西九〇〇メートルの城壁があったが、現在では東墻のごく一部が残るのみである。城内東部・西部では建築群基址が発見されている。地表には大量の瓦・磚・陶器の破片が散らばっている。楡林城村から西約四キロメートル離れたところで発見されたホリンゴル東漢墓の壁画の中に、武城県城が描かれていること、城内に散らばっている陶片がホリンゴル東漢墓出土の陶器と似ていることなどから、本城址は漢代の武城県城と推定されている。武城県は前漢のときに定襄郡下の県として設けられた。後漢以降に放棄されたと見られる。

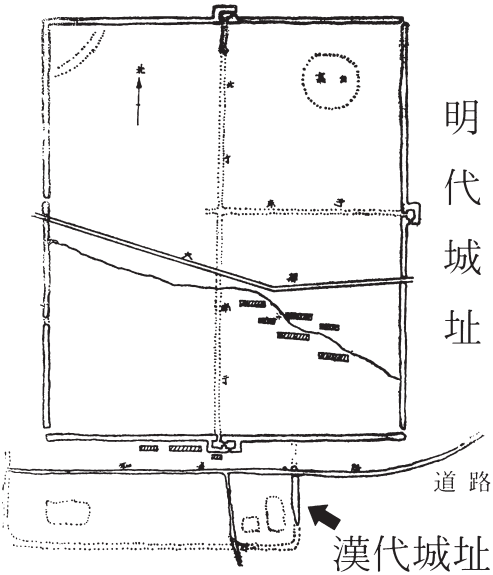
一方、明代の城址は南北一二〇〇メートル、東西一四〇〇メートル、残高一～七・五メートルの城壁が残っている。城壁の中部には四辺とも門が設けられており、東門・南門・北門の外側には甕城が築かれている。城内東北部には円形の建築遺址がある。地表には瓦・磚・石臼・陶器・鉄器の破片などが散らばっている。この城址は明代初期に建設された玉林衛城と考えられ、地元では「楡林城」と呼ばれている。漢代城址はこの楡林城の南部に位置し、漢代城址の北部は楡林城

の南部地下に埋もれている（図1）。

漢代城址が東墻のごく一部しか残っていないこと、及び残存している城壁の位置については、後日になってようやく知った。それゆえ、我々が視察したときには漢代城址がどこにあるのか全く見当がつかず、探し当てることはできなかった。一九八八年に発行された『和林格爾県文物志』によると、「公路」（省道二一〇号線を指すのであろう）の北側には長さ四メートル、残高三・七メートル、底部の厚さ六メートルの城壁が残り、そして公路の南側には長さ一五〇メートルの城壁が残るというが、現在も残っているか否かを確認できなかったことは残念である。

榆林城（北緯四〇度一五分六・一九秒、東経一一二度七分五〇・四六秒、海抜一一六七メートル）は省道二一〇号線のすぐ北側に位置する。今日はあまり時間がなく、かつ雨で地面がぬかるんでおり、またあまりにも広大な城址であるため、南門外の甕城、南墻の東半分、東墻の南部を見学するにとどめた。城壁は土で築かれていたが、南門付近を除けば、南墻と東墻はほとんど土丘と化していた。南墻の東部に城壁の切れ目があり、ここに中国語とモンゴル語の文物碑が一枚ずつ立てられていた。「内蒙古自治区重点文物保護単位　玉林衛古城遺址　内蒙古自治区人民政府二〇〇六年九月四日公布　呼和浩特市人民政府二〇〇七年五月立」と刻まれている。ちなみに、漢代城址も県文物保護単位に指定されているはずであるが、碑が立てられているのか否かは定かでない。城内には広大な畑が広がっており、城内及び南門外側には民家が建てられていた。樹木や作物が生い茂っているため、少なくとも我々が訪れたところからは、城址の全貌を一望することはできなかった。

フフホトから榆林城村までの道を北へと引返し、一七時過ぎより盛楽博物館を見学した。この博物館は土城子城址（後述）の東墻外側に位置する。館内にはホリンゴル県で出土した文物、中でも北朝の文物が大量に展示されていた。博物館

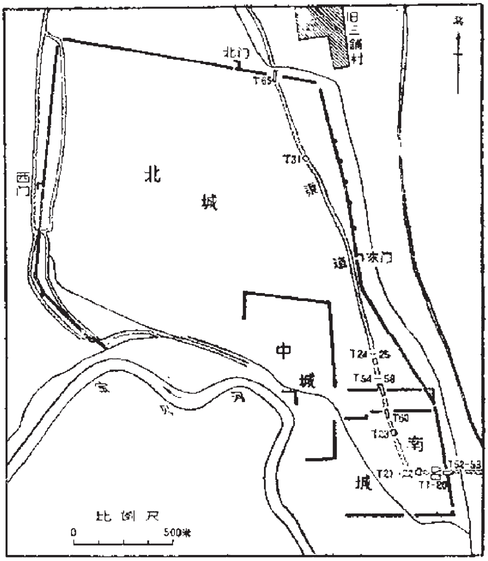


［図1］榆林城村城址

の敷地の中には土で築かれた城壁らしきものが保存されていた。土城子城址の発掘簡報によると、城址の東墻外側には明代の烽燧が残っているというので、[4]おそらくこれは烽燧であろう。その近くに中国語とモンゴル語の文物碑がそれぞれ一枚ずつ立てられていた。「内蒙古自治区級重点文物保護単位　和林格爾県土城子古城　内蒙古自治区人民委員会　一九六四年十月廿二日公布　内蒙古自治区人民委員会立」と刻まれている。

土城子城址（土城子郷土城子村、北緯四〇度二七分四六・二三秒、東経一一一度四六分一四・七一秒、海抜一一〇〇メートル）は前漢~元の城址である。[5]漢の高祖期に成楽県として建設され、ここに定襄郡の治所が置かれた。後漢になると、定襄郡の治所は善無県（現在の山西省右玉県。ホリンゴル県の南東隣）へ移され、成楽県は雲中郡の管轄下へ組み込まれ、後漢末期に放棄された。西晋のとき鮮卑の拓跋部がここを拠点として勢力を拡大し、後に北都盛楽城となった。以後、本城は数度の増築を経て元末まで利用され続けたが、元の滅亡後廃墟となった。

城址は国道二〇九号線の西側に位置する。一九四三年、日本の東亜考古学会が発掘調査を行っており、そのときに採集した土器・瓦当は東京大学総合研究博物館に所蔵されている。中国による発掘調査は一九六〇年以降何度も行われており、それによると城址の概況は以下の通りである。すなわち、城址は南城・中城・北城の三城から成る。南城は東半分のみが残っている。城壁は南北五五〇メートル、東西五二〇メートル。[6]漢の高祖期に建設され、後に鮮卑の拓跋部が改修したものと考えられる。ただし、城内からは戦国晩期の聚落遺址も発見されている。中城は南北七三〇メートル、東西四五〇メートル。北墻と東墻に門が設けられている。遼~元の城址と推測される。[7]北城は南北一七四〇メートル、東西一四五〇メートル。四辺とも門・甕城・馬面が設けられている。唐代の城址と推測される（図２）。



［図２］土城子城址

三つの城址からは窯址・窖穴・住居・道路・排水溝遺址・

墓葬などが発見されており、また瓦・石器・骨器・木器・陶磁器・銅器・鉄器・銅銭（刀銭・半両銭・五銖銭・開元通宝・乾元通宝）・石仏などさまざまな遺物が出土している。

雨が依然として降り続き、地面も極度にぬかるんでおり、歩行することさえ困難となってきたため、見学は北城の北墻を遠方から望見するにとどめた（写真1）。

北城北墻東部の外側には古墓かいくつかあった。地面に穴が開いており、墓道や墓室への入り口、墓室を覆う磚などが見えた。一九六〇年以来行われている発掘調査によると、土城子城址周辺では春秋晩期～元代の古墓が発見され、石器・木器・銅器・鉄器・陶器・漆器・玉器・銅銭などが出土している。[8] 中でも重要なのは、これらの墓葬から「耳鋳公剣」という銘を持つ青銅の短剣が出土していることである。これは春秋晉の文公重耳が使用していたものと考えられている。

一九時半頃、フフホトへ帰着した。

九月二日（日）

今日は朝から晴れていたものの、昨日と同様肌寒かった。

八時半頃、車で卓資県へ向かった。東へ進むにつれて、辺りは徐々に高原となっていった。

一〇時頃、三道営郷土城子村に到着した。土城子村は国道一一〇号線の北側に位置する。道路から一段低いところに、民家が道路に沿って建ち並んでおり、その北側に三道営城址

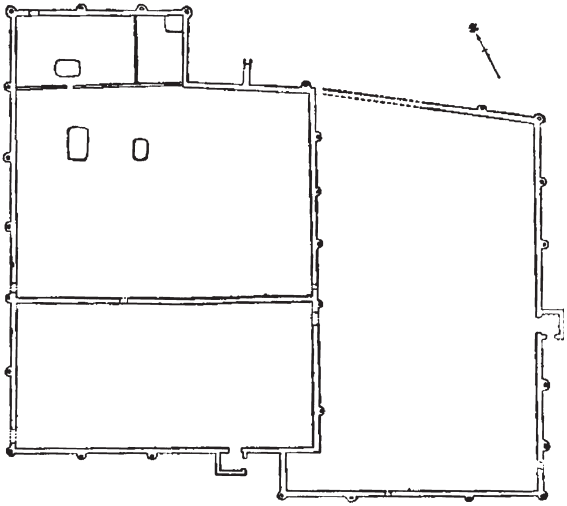
［写真１］土城子城址北墻外側

の南墻があった。

三道営城址（北緯四〇度五九分二九・六八秒、東経一一二度二〇分二八・〇七秒、海抜一三三一メートル）については一九五七年及び一九八七年に調査が行われ、それによると城址の概況は以下の通りである。[9] すなわち、城址は東西両城によって構成されている。西城は南北五七〇～六九〇メートル、東西四八〇メートル、残高五～八メートル、底部の厚さ八～一二メートルの城壁が残っている。東西に走る城壁によって南北両城に区画されている。北城の北西隅は北へ向かって張り出しており、その部分も東西に走る城壁によって区画されている。南墻の東部に門が設けられており、外側に甕城が築かれている。北西隅と南西隅には角楼址があり、城壁の外側には四辺とも馬面が設けられている。城内北部・中部では房屋建築遺址が発見されている。城内では灰陶・瓦・半両銭などが採集されている。年代は戦国～前漢で、前漢では定襄郡武要県城となったと考えられる。[10]

東城は南北六〇〇メートル、東西四七〇メートルの城壁が残っている。西墻は西城の東墻と共有している。東墻の中部に門が設けられており、その外側に甕城が築かれている。北東隅と南東隅には角楼址があり、南・北・東墻の外側には馬面が設けられている。地表からは瓦、唐の開元通宝、北宋の元豊通宝などが採集されている。東城は西城が築かれた後に増築されたもので、築城年代の下限は明代と推定されている（図3）。

我々が実見したところ、城内は畑と民家によって覆い尽くされていたが、城壁は全域にわたって比較的よく残っていた（写真2）。城壁外側に付された馬面も確認することができた。比較的大規模な城址であった。城址の北には大黒河が流れており、さらにその北側には大黒山がそびえていた。この大黒山の南麓と城址の東西に戦国趙の長城があるらしいが（図4）、城址から確認することはできなかった。



［図3］三道営城址

［写真２］三道営城址西城東墻外側

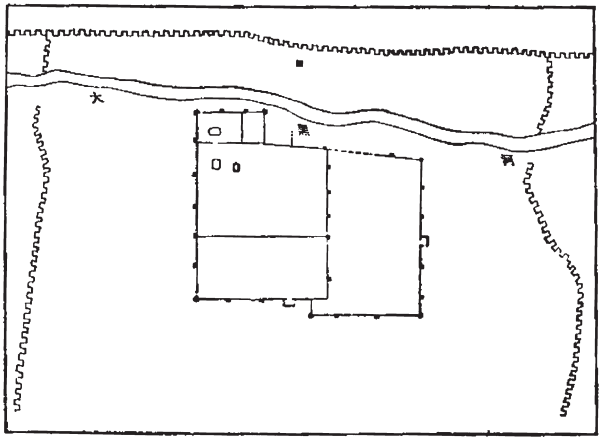
この城址について城内の村民に尋ねてみたが、方言の問題によってほとんど聞き取れなかった。「キア」・「キー」・「ケー」など、普通話にない発音もあった。今回我々が訪れた内蒙古中南部の方言はいわゆる「晉語」に属する。

一二時頃、六蘇木郷城卜子村に到着し、城卜子城址（六蘇木障址）（北緯四〇度五三分二一・九九秒、東経一一二度三二分三九・五七秒、海抜一四五六メートル）を見学した。城址は三道営城址の南東二〇キロメートルに位置し、卓資県の中心部から西へ二キロほど離れたところにある。現在へ至るまでに何度か調査が行われ、中でも一九九五年及び二〇一〇年には城址を貫く国道一一〇号線の建設・拡張に伴い、内蒙古自治区文物考古研究所などによっていわゆる「搶救性考古発掘」が行われた。これまで行われた調査によると、城址の概況は以下の通りである。[11] すなわち、一辺一八〇メートル、残高三・五メートル、底部の厚さ五・七メートルの城壁が残っている。[12] 南墻の中央、及び北墻のやや西寄りにそれぞれ門が設けられている（図5）。瓦・陶器・石斧・銅鏃・鉄器・銅銭などが出土している。陶片の中には文字が刻まれているものもある。中でも、匣鉢には九つの文字が刻まれており、それらのうち識別できるのは「肖」・「宮」・「立」・「史」のみであるが、いずれも古文篆体であり、戦国趙で用いられていた字体である。「肖」は「趙」の古体でもある。銅銭は布銭と圜銭が出土している。布銭の中には「茲氏」・「大陰」・「中陽」・

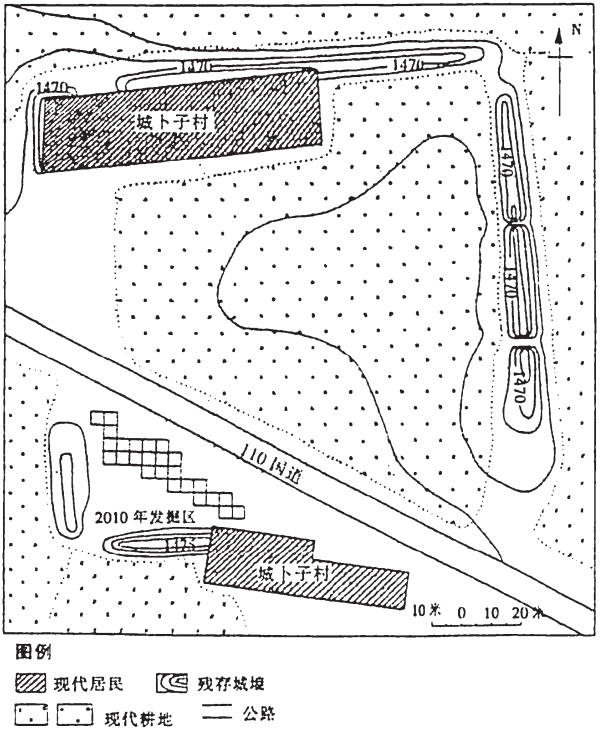
「城襄」・「邻」・「□邑」などの銘を持つものもある。

築城方法・規模・出土遺物、及び戦国趙長城の南に位置することなどから、趙長城の付属施設として築かれた障城と考えられている。この地が趙の版図へ入ったのは紀元前三〇〇年頃であるから、これ以降に建設されたと推定される。

我々が実見したところ、四辺の城壁はほぼ残っていたが、国道一一〇号線が南墻の中部から西墻の中部にかけて貫いており、その部分の城壁は完全に破壊されていた。それゆえ、南門の遺構を確認することはできなかった。北門は明確に残っていたが、そのすぐ南側には民家が建てられていた（写真3）。北墻は比較的高かったが、他の墻の高さは我々の背丈にも満たなかった。城壁の上には四辺とも樹木が植えられていた。障内には民家と畑が広がっていた。北方には趙長城があるはずであるが、障址からは確認できなかった。



［図４］三道営城址と長城



［図５］城卜子城址

［写真３］城卜子城址北墻外側（城壁の切れ目が北門）

卓資県の中心部へ入り、昼食をとった。中心部には小さな書店がいくつも建ち並んでいた。これは卓資県が中国最大の海賊版書籍の生産地であることに関係があるらしい。

フフホト市へ戻り、金河鎮西達頼営村へ向かった。何度も道に迷いながら、一六時半頃西達頼営村に到着した。同村はフフホトの南東郊に位置する。ここで西達頼営城址（北緯四〇度四三分三九・四三秒、東経一一一度五〇分六・三九秒、海抜一〇七四メートル）を見学した。西達頼営城址は漢代の城址である。[13] 南北四〇〇メートル、東西三六〇メートル、残高一～三メートル、底部の厚さ一六メートルの城壁が残っている。瓦・磚・灰陶の破片などが採集されている。二〇一二年、市重点文物保護単位に指定された。[14]

我々は南墻と西墻のみを見学したが、田畑のあぜ程度に盛り上がっている程度であった。南墻・西墻とも中央が窪んでいた。村民によると、これは近年水路として掘られたものとのことであった。城壁の上には四辺とも樹木が植えられていた。城址の内外は畑となっていた（写真４）。

本城址について何人かの村民に尋ねたところ、以下の通りであった（運転手に方言を普通語に通訳してもらった）。すなわち、本城址は後漢の光武帝期に築かれた。近年城内の土が採取されたため、城内には何も残っていない。文物局がこれをやめさせ、何とか城址は保たれた。当地には他にも一一基の古城があり、合わせて「十二連城」と称する、と。後述

［写真４］西達頼営城址西墻内側（樹木が立ち並んでいるところが西墻）

するジュンガル（准格爾）旗の十二連城とは別のものらしい。ちなみに、十二連城と呼ばれる城址群は他にも中国各地に存在する。

フフホト泊。

九月三日（月）

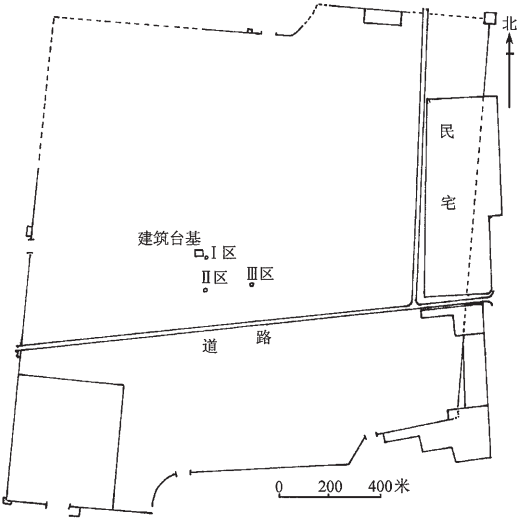
八時頃、フフホト市南西部のトクト県へ向かって出発した。昨日と同様、フフホトを離れるにつれて、辺りは高原となっていった。道中、すさまじい渋滞に見舞われた。やはりトラックが異様に多かった。別の道を通ってトクト県へ向かった。

一〇時頃、古城郷古城村に到着し、古城村城址（北緯四〇度三一分二四・九九秒、東経一一一度二〇分一二・三七秒、海抜一〇〇一メートル）を見学した。本城址については現在へ至るまで何度か調査が行われており、それによると城址の概況は以下の通りである。[15] すなわち、本城址は不規則な形をしているが、おおむね東墻が一五八五メートル、西墻が一九〇〇メートル、南墻が一九二〇メートル、北墻が一七九〇メートル、残高〇・五～六メートル、底部の厚さ八～一〇メートルの城壁が残っている。[16] 南西隅に南北四八五メートル、東西四一五メートルの小城が設けられている。南墻には三つの門が設けられており、それらのうち最も西の門は小城の南墻に設けられている。北墻・西墻にも門が一つずつ設けられている。城址の中部からは建築遺址が発見されている（図6）。

磚・瓦・陶器・骨器・石器・銅器・鉄器・銅鏃・銅銭（刀銭・半両銭・五銖銭・大泉五十）・石刻仏像、及び北魏太和八年鎏金銅仏像などが出土している。

『水経注』などの文献の記載、出土遺物、及び「雲中」・「雲」と記された漢代の陶缶が出土していることから、本城址は雲中城址と考えられている。雲中城は戦国趙によって建設されて雲中郡治が置かれ、秦・漢もこれを踏襲し、北魏では雲中鎮となった。

古城村城址はあまりにも広大なので、遺構が比較的明確な



［図６］古城村城址

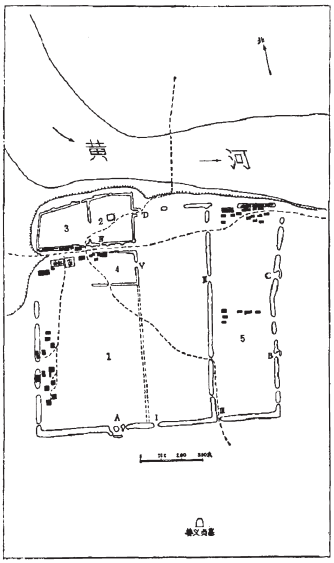
西墻南部・南墻西部及び南西隅の子城のみを見学した（写真5）。この辺りは城址の内外ともに畑が広がっていた。城内中部の舗装された道の南側に、中国語とモンゴル語の文物碑が一枚ずつ立てられていた。「内蒙古自治区重点文物保護単位　雲中城遺址　内蒙古自治区人民政府　立　一九八八年六月　日」と刻まれている。

トクト県の中心部に入り、当地の料理である莜麺などを食べた。昼食後、トクト県南隣のジュンガル旗へ向かった。一四時半頃、十二連城郷に到着した。この地域の伝説によると、ここには全部で九つの城址があったが、現在では五つ（一号城～五号城）のみ確認されている[17]。また、十二連城郷から七キロメートル南東の城坡村にも三つの城址がある。十二連城とは十二連城郷の九つの城址と、城坡村の三つの城址を総称したものである。

一号城～五号城（北緯四〇度一五分二四・四六秒、東経一一一度三分一六・九八秒、海抜一〇一二メートル）はあたかも一つの城であるかのごとくに、相互に隣接して築かれている（図7）。城址のすぐ北側では黄河が東へ向かって流れている。一九六三年に内蒙古自治区文物工作隊が行った調査によると、各城址の概況・年代などは以下の通りである。

一号城　南北一〇三九メートル、東西八五七メートル、残高四～一八メートル、底部の厚さ二二・五～三三メートルの城壁が残っている。ただし、北西隅は二・三号城建設の際に

［写真５］古城村城址西墻（北へ向かって撮影）



［図７］十二連城一～五号城址

破壊されたと見られる。一号城の東に五号城が隣接しており、一号城の東墻（五号城の西墻）によって一号城と五号城とに区画されている。北墻・南墻はそれぞれ五号城の北墻・南墻に連なっている。南墻の中部に門が設けられている。馬面は設けられていない。

二号城　一号城の北西隅に位置する。南墻は長さ二〇九・五メートル、残高四～八メートル、北墻は長さ二一一メートル、残高一～四メートル、底部の厚さ一五メートル、東墻は長さ二三七メートル、残高二～四メートル。西墻は破損がひどく、北端に一二九メートル、南端にごく一部の城壁が残るのみである。二号城の西に三号城が隣接しており、二号城の西墻（三号城の東墻）によって二号城と三号城とに区画されている。北墻・南墻はそれぞれ三号城の北墻・南墻に連なっている。城壁はかつて磚で覆われていたが、現在は剥がされ

ている。南・東・北墻には馬面が設けられている。東墻中部には門が設けられており、その外側には甕城が築かれている。

三号城　南墻は長さ二六六メートル、北墻は長さ二四八メートル、残高六メートル、底部の厚さ一五メートル、西墻は長さ一九一・三メートル、残高一～三メートル。二号城と同様、かつては城壁が磚で覆われていた。南墻・北墻には馬面が設けられている。西墻は馬面がなく、一号城の西墻をそのまま利用したものと考えられる。

四号城　二・三号城の南に位置する。現在では城址の内外に民家が建ち並んでおり、城壁の残存状況はあまりよくない。西墻は既になく、南墻・北墻は東端が残るのみ。東墻は長さ一六五メートル、残高一～二メートル。

五号城　南墻は長さ三〇八メートル、東墻は長さ一〇一九メートル、残高二メートル、底部の厚さ二二・五メートル。北墻はわずかに一か所残るのみ。東墻には門及び甕城が二か所設けられている。

築城方法から見ると、最初に一号城・五号城の北墻、五号城の東墻、一号城の西墻が建設され、後に一号城・五号城の南墻と一号城の東墻（五号城の西墻）が建設され、一号城と五号城とに区画された可能性がある。当初の南墻は現在の南墻の地下か、他の箇所に埋まっているのかもしれない。城址の南四五〇メートルに位置する古墓から出土した墓誌に、

勝州榆林縣歸寧鄉普靜里故人品子姜義貞、年卅五、開元十九年歳次辛未二月庚辰朔三日壬午故。其月十一日辛卯、殯在州城南一里東西道北五十歩。祖在其前。銘。

とあること、四五〇メートルはちょうど唐代の一里に相当すること、城内から隋・唐の遺物が多数出土していることから、一号城・五号城は隋・唐の勝州榆林城故址と考えられる。ちなみに、十二連城郷では二〇〇二年にも唐代の白休徴墓誌が出土し、その中に「其月十九日合葬于勝州之東」と記されている。[18] 史書によると、榆林城は隋・文帝の開皇七年（五八七年）に建設された。ただし、一号城・五号城からは漢代・北魏のものと見られる瓦が出土し、また一号城～五号城では漢代の半両銭・五銖銭、王莽期の大泉五十も採集され、城外では漢代の墓葬も大量に発見されている。『元和郡県志』によると、この地はもともと漢代の雲中郡沙南県に属するとされており、しかも雲中郡に属する県のうち、沙南県のみが黄河の南岸に位置する。それゆえ、元は漢代の沙南県城であった可能性もある。

一方、二・三号城は同時に建設され、磚の状況から見て明代の城址であり、文献の記載からすると明代の東勝右衛故城と考えられる。城内からは元・明の文物が採集されている。

我々は一号城の南墻西部と二号城を見学した。一号城南西部及びその外側には家屋が建ち並んでいた。それらの家屋の中には磚で覆われているものもあり、また磚が地面に積まれているところもあった。あるいは、村民が二・三号城から剥

がしたものかもしれない。城外南西部には城壁のような土壁が至るところに見られたが、これらは城址とは無関係のごとくである。

二号城は北墻・東墻がよく残っていた。二号城の北部から南方を見ると、樹木が東西に立ち並んでおり、南墻を確認することはできなかった。北墻の上には三枚の文物碑が立てられていた。中央の碑には「内蒙古自治区人民政府　立　一九八八年六月　日」と刻まれており、その左側の碑にはモンゴル語で同じ文面と思われるものが刻まれていた。右側の碑には「全国重点文物保護単位　十二連城城址　中華人民共和国国務院公布　国家文物局二零零六年六月」と刻まれていた。北墻北側のすぐ下には黄河が流れていた。城内は全て畑と化していたが、ここには家屋は一軒も建てられていなかった。地表には陶片や磚の破片が散らばっていた。磚はかつて二号城の城壁を覆っていたものであろう。二号城から東方を見ると、一号城の北墻と東墻が見えた。特に、北墻はかなりの高さがあった（写真6）。

本城址の見学を終えたところで、既に一六時半を回っていた。当初の予定ではさらに城坡村に残る城址と、納林郷の美稷城址（北緯三九度四六分二七・三六秒、東経一一〇度四七分一九・七八秒、海抜一〇八四メートル）を見学する予定であったが、今日はここから包頭市まで行かなければならない

［写真６］十二連城一号城北墻

ので、断念した。

ジュンガル旗西隣のダラト（達拉特）旗を通り、西方の包頭へ向かった。ダラト旗では車の交通量が少なかった。ここも高原であったが、砂漠に草が生えているような状態であった。包頭へ近づくにつれ、交通量が多くなってきた。

包頭賓館泊。

九月四日（火）

本日と翌日五日は包頭付近の遺址を見学した。包頭は近年、鉄鋼・石炭・レアアース等の資源掘削で大きな利益を上げ、急速に発展を遂げた内蒙古自治区の大都市である。「包頭」の地名の由来には諸説ある。[19] 戦前の包頭と比べ、[20] 現在の包頭市付近には世界最大級のレアアースの鉱山「白雲鄂博」があり、[21] 市内には包頭鋼鉄集団及び包頭鋼鉄（集団）有限公司（元の包頭鋼鉄公司）[22] の大工場もあり、経済を下支えしている。包頭同様に経済成長を遂げたオルドスは早くも不況の波に飲み込まれつつあるともいわれるが、[23] 包頭の町にはまだ活気があるようにもみえた。ただし市内には中国有数の富裕層が生活する一方で、現地のタクシー運転手の中には月給約二千元の者もおり、貧富の格差は大きいようである。また鉄鋼等の生産に伴い、環境問題も深刻化している他、[24] 市外の生活環境も必ずしも良好とはいえず、清潔面等で改良の余地がある。自然環境面では雨の少ない乾燥地帯とされる。もっとも、我々が訪れたのは豪雨の数日後で、道は水浸しになっており、排水機構の機能不全も窺えた。あるいは内蒙古自治区の他の地域と同様に、土壌アルカリ化問題を抱える土地もあるのかもしれない。[25]

ともあれ、このように包頭は近年急速に経済発展を遂げ、メリットとデメリットの両方を抱えた現代都市であるが、市の内外にはまだ戦国秦漢時代の遺跡も多く残っている。とくに近年発掘された漢代墓葬の数は多く、墓葬・出土品の大部分は、魏堅編著『内蒙古中南部漢代墓葬』にまとめられている。[26] また国家文物局主編『中国文物地図集　内蒙古自治区分冊（上下冊）』（西安地図出版社、二〇〇三年）にも墓葬や、城址・長城等々が多くみえる。そこで我々は、九月四日と五日の二日間をかけて、包頭付近の代表的な遺跡の中でも、とくに増隆昌古城・固陽県長城・趙北長城・三房帳古城・麻池古城を踏査することにした（地図2）。

この日は朝八時に賓館を出、烏拉特前旗小佘太郷へ向かった。小佘太郷北東に増隆昌水庫がある。周辺は高原で、草木は少なく、砂漠に若干草が生えている程度だった。一〇時五〇分頃に増隆昌水庫に到着した。水庫北側に増隆昌古城があった（写真7、西壁）。

増隆昌古城（北緯四一度十一分二一・〇七秒、東経一〇九度三四分五四・三三秒、海抜一四〇八メートル、写真7）は一般に、前漢武帝期に派遣された光禄勲徐自為が建設した

［写真７］増隆昌古城①

「漢代光禄城」とされる。[27] 現に、城内からは漢代文化色をもつ瓦・瓦当・土器・銅鏃・五銖銭が見つかっている。また北魏鮮卑文化色をもつ瓦・瓦当・土器なども見つかっている。よって本城は現在、前漢武帝期～後漢前期の城址とされ、北魏時代にも再度修繕・利用されたといわれている。[28] 増隆昌古城の北側は陰山山脈、南側は増隆昌水庫に面し、東西は開けている。陰山山脈の上には赤色土の長城らしきものや、烽燧らしきものがみえた。現に増隆昌古城の北約一㎞には秦漢長城があるはずで、[29] それは付近の長城の中でも最も保存状態が良いとされる。[30] 残念ながら北上する道がなく、山上に近づくことができず、今回は見学を断念した。そこで城内のみを見学することにしたわけだが、まず城内にはハエとバッタが大量におり、トカゲ等もいた。周囲にはペットボトル等が散乱し、遺跡の保存状態はあまりよくない。西墻中部から東墻中部にかけて谷があり、パイプラインが通っており、谷は人工的に掘削したものとみられる。西墻中部から入城し、西北城壁に登ると、非常に見通しがよい。城壁の内外には陶片が散らばっており、城内の南半分は畑となっていた。続いて西墻中部から城壁沿いに北上し、次に北墻を東進した。北墻外部に文物碑があり、その後方の城壁はやや出っ張っており、高台になっていた（写真８）。所謂「馬面」のようにもみえる。[31] その後、東墻を南下し、東墻中部（パイプライン付近）で再び西へ折れ、城内を南へ進み、最後に南墻を西進した。南墻

［写真８］増隆昌古城②

のすぐ下は水庫であった。城内で農作業中の農民に聞くと、昔この辺りは川で、それが後に堰き止められて水庫になったらしい。なお付近には本来「大佘太古城」と呼ばれるもう一つ漢代古城があったらしいが、水庫修築時に水没したという。[32]

増隆昌古城調査後、郷で食事をとり、午後一時頃に固陽県の秦漢長城に着いた。

固陽県長城は戦国時代に本格的に増築されたもので、[33]その部分は「先秦長城」や「戦国長城」等ともよばれる。一九九六年に全国重点文物保護単位に指定され、二〇〇七年初にはＧＰＳを用いた詳細な地理的分析がなされた。[34]長城の七割は石積み、二割は土盛りよりなり、一割は土石混交型とされる。[35]かかる長城の材質の違いは一般に地理的差異によるとされているが、「燕・趙・魏の長城＝版築製」、「秦長城の一部＝石積製」と区別する説もある。[36]この固陽県長城は概して包頭北・陰山山地上にあり、海抜は一六〇〇ｍ前後である。秦漢長城の方は、前二一五年に蒙恬が匈奴を討伐した際にさらに増築したものとみられる。[37]また長城付近（基本的に二〇～五〇ｍ以内、遠くとも一〇〇ｍ以内）の小高い平地には烽燧があり、[38]烽燧等には馬面・排水設備をもつものもある。[39]固陽長城の烽燧全体を見渡すと、それは平均五〇〇ｍ（状況に応じて長短あり）ごとに設置されているとのことで、我々が以前調査した居延や敦煌の烽燧の間隔よりもやや狭いようである。[40]ただし残念ながら今回はそれらの烽燧全てを実見する時間はなかっ

た。また各烽燧の建築基材である石片には絵（いわゆる岩画）のあるものもあり、羊・山羊の群生を窺わせるものの他に[41]、牛耕図とおぼしきものや（S72出土）、遊牧民の包（パオ）の図とおぼしきものもあり、当時の生活を窺わせる貴重な資料として、今後の詳細な調査に期待したい。それはともかく、以上のような概観を有する固陽県長城のうち、我々が今回調査したのは秦長城である（写真9、10）。付近は山地で、集落や畑はなかった。「秦長城」と記された大きな看板があり、観光用の城門もあった。手前には文物碑が三枚（漢語・モンゴル語・英語）あり、「世界文化遺産」と刻まれていた。長城は平たく積み重ねた黒い石片よりなっている。石片は、建設会社が[42]世界遺産として整備する際に積み直したものらしく、非常に整然としていた。付近に烽燧もあるはずで、現にそれらしき石製の建設遺址のようなものもあり（写真11）、後日包頭市博物館でみた写真・説明にもそう書いてあったが、これも最近石を積み直したものである可能性がある。長城を西進すると、途中に衛青の像があった。周知のとおり、衛青は前漢武帝に仕えた将軍で、バヤンノール付近の匈奴を駆逐し、固陽県長城付近を制圧した。

次に、固陽県秦漢長城付近に残る趙北長城を見学した（写真12）。ここも観光地化しており、東西に延びる丘の上には巨大な趙武霊王の像、麓には小さな駐車場と「胡服騎射広場」の標識があった。趙北長城はこの武霊王像のある丘の直下に

［写真９］固陽県秦長城①

［写真10］固陽県秦長城②

［写真11］固陽県秦長城③――烽燧――

［写真12］趙北長城

あり、東西に延々と伸び、版築製のようである。武霊王は前三〇〇年前後の戦国趙の王で、「胡服騎射」[43]を採用して趙を軍事大国とし、固陽付近の林胡・楼煩などを制圧し、中山を征服し、秦昭襄王の即位時の後ろ盾となったことで知られる。当時、趙の周囲には、国境地帯を蹂躙する匈奴三胡、商鞅変法と張儀連衡策で強国化した秦、宣王・孟嘗君のもとで強国化した斉、申不害変法で強国化した韓などがおり、その中で趙も武霊王期に急成長を遂げ、その頃に趙北長城を築いたとされる。[44]

趙北長城の見学後、包頭市内へ戻った。万達広場で軽食をとり、新華書店で資料収集をした後、市内で有名とされる王偉焼烤店（串焼屋）で夕食をとった。

九月五日（水）

八時半頃、大型ワゴン車で西方烏拉特前旗黒柳子郷三房帳村へ向かった。目的は三房帳古城の見学である。包頭は工業地帯のためか、晴れているのに遠方が霞み、見通しが悪い。道路沿いの風景は、砂漠に草が生えているごとくであった。

三房帳古城は一般に九原城とされる。[45]九原城は戦国趙が西北辺境に築いた城（初建時期は不明）で、郡城か県城かで諸説ある。[46]趙武霊王が林胡・楼煩・匈奴などを追った後、そこを統治する目的で新築ないし改築されたものとされる。いずれにせよその後、前二一四年に蒙恬が三十万の軍で匈奴を討

［写真13］三房帳古城

伐し、九原城を九原郡治とし、前一二七年（元朔二年）に五原郡に改称されたことが知られる。やがて王莽期になると匈奴が南下し、漢人は城を捨てて逃げた。盧芳が一時的に五原郡等を占領したが、西暦三九年（建武一六年）に盧芳が投降し、五原郡も後漢王朝に帰属した。

九時五〇分頃、黒柳子郷三房帳村に到着した（写真13）。現在城址は黄河の灌漑等で残存していないとのことで[47]、現に村人もそう言っていた。現地の古老の白喜福氏（六二歳）が同行し、城址を案内してくれた。彼は「家」を「Kya」に近似する音で発音するなど、独特の方言を持っていた[48]。しばらく村内を車で走ると、村の西側の畑に到着した。かつて三房帳古城の東墻があったところらしい。だがやはりほぼ何の痕跡もなかった。南東隅には城壁らしきものも残っていたが、遺址なのか、それとも畑の整備時に生じた土塁なのかは判別できなかった。古老の幼少期（一九五〇年代）にはまだ数mの城壁があり、南墻の南側にも溜池があったらしいが、徐々に破壊され、一九九五年頃の土地再分配政策で城内外に田畑が布かれ、最終的に全て破壊されたという。

次に古老の紹介で、付近にあった宋代遺址の「慌糧堆」なるものを見学した（写真14）。所謂『楊家将演義』で有名な北宋・楊家の武将達が敵（遼軍）と対峙した際に、兵糧にみせかけて作成した盛土だという。史実か否かはともかく、地元に伝わる貴重な民間伝承の一つである。また当該遺址の地

［写真14］慌糧堆

下からはかつて後漢文物も発見されたらしいが、古老によれば三、四年前に蒙古族が全て持ち去ったとのことである。土堆北側に小穴があり、磚らしきものが散らばっていた。磚室墓の一部か。「慌糧堆」は周囲にいくつもあるそうで、類似の土堆をいくつか実見できた。

包頭市内へ戻り、南の麻池古城へ向かう。麻池鎮には巨大な騎馬武者像があり、方天戈戟を携えており、『三国志演義』の呂布のようにみえる。『後漢書』劉焉袁術呂布列伝や『三国志』魏書呂布伝によれば、呂布は五原郡九原県の人で、地元の英雄ということになるので、それゆえここに像が造られたのかもしれない。さらに奥へ進むと道路左側に麻池古城がみえた（写真15）。

麻池古城は「日」字形もしくは「呂」字形で、北城と南城よりなり、北城は南北六九〇ｍ、東西七二〇ｍ、南城は南北六六〇ｍ、東西六四〇ｍに及ぶ。漢代城址のどれに当たるのかについては、稒陽県城とする説[49]、臨沃県城とする説[50]、沃陽県城とする説[51]、五原郡城とする説[52]、北城のみ五原郡郡治兼九原県県治（＝戦国趙九原郡郡治）とする説がある[53]。付近は地下水源が豊富で、清代初期には麻の栽培地と「麻池＝麻をひたしておく場所」が多く、それゆえ「麻池」の名を冠するようになったとされる[54]。本来この地にはモンゴル人が多く住んでいたようであるが、清朝～民国期に開墾事業が推進され、漢人の定住が進んだ[55]。麻池古城付近からは、狩猟の様子を描

［写真15］麻池古城①（南壁の上から東壁を望む）

いた漢文化色の濃い器物等が見つかっている他、周辺からは一九五〇年代以来、膨大な数の漢墓（いわゆる召湾漢墓など）も見つかっており、漢文化の影響の濃さを物語る。麻池古城付近からは他にも漢代五銖銭や、「單于和親」「單于天降」「四夷□服」「千秋萬歳」「長樂未央」瓦当等も出土し、瓦当は王昭君の出塞と、それに伴う漢―匈奴間の和親締結を記念したものともいわれる。[56] また付近の「孟家梁漢墓」や「上窩爾吐壕」からは陶製の器物や銅鏡・銅印・石硯や、大泉五十・貨泉も見つかっている。[57] なお麻池古城からは燕国刀幣が、[58] 麻池古城付近の墓葬からは安陽・中都・平陽・襄垣・戈邑等々の銘をもつ大小の方足布や、[59] 安陽布銭の銭範も見つかっており、[60] とくに安陽布銭の銭範の存在はその付近が戦国以来の城であることを示唆する。[61] それはともかく、我々は十二時頃に麻池古城の南墻中央部に到着した。城壁の切れ目から城内に入ると、右手に「全国文物保護単位」の文物碑があった。城内は全て畑で、ネギ等を栽培しており、作業小屋以外の家屋はみられない。城壁の上と地面には陶片が散らばっていた。作物が生い茂っているため、城内からの見通しはあまりよくないが、城壁の上からは全景を鳥瞰できた。とくに南墻は高く、版築が明確で、版築各層の厚さは一〇～一五㎝程度であった（写真16）。南墻の上を東進し、南東角に到達した。遺址が「自治区文物保護単位」であった時の古い文物碑があった。その後、東墻を北上した。東墻の残存状況はよく、一列に整

［写真16］麻池古城②（版築）

然と城壁が残っており、中部にのみ切れ目があり、道路が走っている。そこにも「全国文物保護単位」の文物碑があった。さらに東墻の上を北上すると、東西に走る城壁があった。北城と南城を区切る中央横画の城壁がどこかにあるはずだが、確認できなかった。北墻は畑のあぜ道程度の高さで、残存状況はよくない。北墻の途中で左に折れ、城内の農道を通り、南墻中央部に戻った。その後、南墻西部と西墻の上を踏査した。

包頭市内へ戻り、昼食（地元料理の燜麺）を食べ、その後、包頭市博物館を見学した。入場無料で、展示物の多くは当地の文物であった。一階に文物一般、二階に岩絵・タンカが展示され、一階売店に書店があった。三時半頃に博物館を出、柿沼はその日の一八時五五分発ＨＯ一二五八便で上海へ、水間は翌日一五時四〇分発ＭＵ二九九二便で厦門へと戻った。

注

（1）例えば一九九九年、包頭市交通局が包頭市新城郷辺墻壕村で道路を建設した際、包頭市文化局文管部門の制止にもかかわらず、戦国趙の障址の南部を破壊し、更地にしてしまったという事件が起こっている。「8万元出売了最老的長城」（『広州日報』一九九九年一二月四日）参照。

（2）水間大輔・柿沼陽平「青海省北部漢代遺址等視察記」（『史滴』第三二号、二〇一〇年）参照。

（3）蓋山林『和林格爾漢墓壁画』（内蒙古人民出版社、一九七八年）

五・六頁、和林格爾県文物保護管理所編刊『和林格爾県文物志』（一九八八年）九〇・九一頁、九九～一〇二頁参照。

（4）内蒙古自治区文物工作隊「和林格爾県土城子試掘記要」（『文物』一九六一年第九期）参照。

（5）以下、土城子城址については「和林格爾県土城子試掘記要」、『和林格爾県文物志』八五～九〇頁、内蒙古文物考古研究所「内蒙古和林格爾県土城子古城発掘報告」（『考古』編輯部編『考古学集刊』第六集、中国社会科学出版社、一九八九年）、李逸友編著『内蒙古歴史名城』（内蒙古人民出版社、一九九三年）三二～三八頁、蘇哲「内蒙古土黙川、大青山的北魏鎮戍遺迹」（北京大学中国伝統文化研究中心編『国学研究』第三巻、北京大学出版社、一九九五年）、内蒙古文物考古研究所「和林格爾県土城子古城考古発掘主要収獲」（『内蒙古文物考古』二〇〇六年第一期）参照。

（6）土城子城址の城壁の長さは注（5）で挙げた論文・書籍の間で異なっているが、ここでは最新の研究成果である「和林格爾県土城子古城考古発掘主要収獲」によった。

（7）ただし蘇哲氏は、中城からは北魏の遺物も多数出土しているので、北魏の盛楽城の範囲は少なくとも中城と南城を含むものであったと推測している。「内蒙古土黙川、大青山的北魏鎮戍遺迹」参照。

（8）内蒙古自治区文物工作隊「和林格爾県土城子古墓発掘簡介」（『文物』一九六一年第九期）、魏堅編著『内蒙古中南部漢代墓葬』（中国大百科全書出版社、一九九八年）三二一～三二六頁、「和林格爾県土城子古城考古発掘主要収獲」参照。

（9）張郁「卓資県土城村的古城遺址」（『文物参考資料』一九五七年第五期）、李興盛「内蒙古卓資県三道営古城調査」（『考古』一九九二年第五期）、国家文物局主編『中国文物地図集　内蒙古自治区分冊（下）』（西安地図出版社、二〇〇三年）五三九頁参照。

（10）ただし、何天明氏は三道営城址を漢代の雲中郡武泉県城と推測している。「試探内蒙古東漢時期的行政建置」（『北方文物』一九九五年第四期）参照。

（11）李興盛・郝利平「烏盟卓資県戦国趙長城調査」（『内蒙古文物考古』一九九四年第二期）、内蒙古自治区文物考古研究所・烏蘭察布博物館「卓資県城卜子古城遺址調査発掘簡報」（内蒙古自治区文物考古研究所編『内蒙古文物考古文集』第三輯、科学出版社、二〇〇四年）、内蒙古師範大学歴史文化学院考古文博系・内蒙古自治区文物考古研究所「卓資県城卜子古城遺址二〇一〇年発掘簡報」（『草原文物』二〇一一年第一期）参照。

（12）城卜子城址の城壁の長さ・残高・厚さは「卓資県城卜子古城遺址調査発掘簡報」によった。

（13）『中国文物地図集　内蒙古自治区分冊（下）』一三頁参照。

（14）「我市公布第三批一六処市級重点文物保護単位」（『呼和浩特晩報』二〇一二年五月一九日）参照。

（15）『内蒙古歴史名城』一六～一九頁、蘇哲「内蒙古土黙川、大青山的北魏鎮戍遺迹」、『中国文物地図集　内蒙古自治区分冊（下）』二六頁、内蒙古自治区文物考古研究所・托克托県博物館「托克托県古城村古城遺址発掘報告」（『内蒙古文物考古文集』第三輯）参照。

（16）古城村城址の城壁の長さ・残高・厚さは「托克托県古城村古城遺址発掘報告」によった。

（17）以下、十二連城城址については李作智「隋唐勝州楡林城的発現」（『文物』一九七六年第二期）、『中国文物地図集　内蒙古自治区分冊（下）』六〇八頁参照。

（18）石俊貴・劉燕「准格爾旗十二連城出土的唐代墓誌与東受降城的地望」（『内蒙古文物考古文集』第三輯）参照。

（19）佐平「包頭地名初探」（『包頭史料薈要』第二輯、一九八五年）。

（20）戦前の包頭経済については南満州鉄道株式会社天津事務所調査課編『包頭一般経済事情』（南満州鉄道天津事務所、一九三六年）

等参照。

(21) 馬鵬起「包頭稀土科研発展簡史」(『包頭史料薈要』第七輯、一九八二年)。

(22) 莫言「包頭鋼鉄集団和包頭鋼鉄(集団)有限責任公司正式成立」(『稀土信息』一九九八年第六期)等参照。

(23) 田中信彦「現地ルポ・内蒙古オルドス市 ゴーストタウンと化した「中国のドバイ」の悪夢」(『週刊東洋経済』第六四一五号、二〇一二年)等。

(24) 周芸華・山本格「内蒙古自治区包頭市の環境問題と省エネルギー」(『省エネルギー』第四七巻第三号、一九九五年)。

(25) 内蒙古自治区額済納旗の土壌アルカリ化問題については原宗子「内蒙古自治区の灌漑とアルカリ化に触れて:居延視察報告(光陰似箭)」(『中国研究月報』第五九巻第一〇号、二〇〇五年)。

(26) 魏堅編著『内蒙古中南部漢代墓葬』。

(27) 李逸友「漢光禄城的考察」(『内蒙古文物考古』一九八四年第三期)は『漢書』巻六武帝紀太初三年夏四月条「遣光禄勳徐自爲築五原塞外列城、西北至盧朐、游擊將軍韓説將兵屯之」、顔師古注引晉灼注「地理志從五原稒陽縣北出石門鄣、即得所築城」、『漢書』巻六武帝紀太初三年秋条「匈奴入定襄・雲中、殺略數千人、行壞光禄勳諸亭障」、顔師古注引応劭注「光禄勳徐自爲所築列城、今匈奴從此往壞敗也」、『漢書』巻九四匈奴伝下甘露三年条「單于就邸留月餘、遣歸國。單于自請願留居光禄塞下、有急、保漢受降城。漢遣長樂衛尉高昌侯董忠・車騎都尉韓昌將騎萬六千、又發邊郡士馬以千數、送單于出朔方雞鹿塞」、『漢書』巻八宣帝紀甘露三年二月条「單于罷歸。(遣)長樂衛尉高昌侯忠・車騎都尉昌・騎都尉虎將萬六千騎送單于。單于居幕南保光禄城。詔北邊振穀食。邪支單于遠遁、匈奴遂定」等に基づき、「列城=光禄塞=光禄城=長城=増隆昌古城=漢代光禄城」とする(また『水経注』所載の「光禄城」と『漢書』所載の「光禄城」「光禄塞」は異なるとも指摘する)。一方、李六生「包頭疆域建置沿革——从戦国至清末」(『包頭史料薈要』第十二輯、一九八四年)によれば、張郁氏は増隆昌古城=漢五原西塞とするが、この説は一般的でない。

(28) 張海斌・楊惦恩主編『固陽秦長城』(内蒙古大学出版社、二〇〇七年)、第一〇六頁。

(29) 『固陽秦長城』、第一〇六頁。

(30) 『固陽秦長城』、第一〇頁。

(31) 「馬面」については水間大輔・柿沼陽平「青海省北部漢代遺址等視察記」で唐代以後に頻見するとしたが、漢代にも類似の建築構造がみられるらしい。唐暁峰「内蒙古西北部秦漢長城調査記」(『包頭史料薈要』第一輯、一九八〇年)、『固陽秦長城』等。

(32) 李逸友「漢光禄城的考察」。

(33) 呉春龍「走近固陽秦長城」(『中国長城博物館』二〇一〇年第一期)。

(34) 『固陽秦長城』、第一三頁~四九頁。

(35) 『固陽秦長城』、第一四頁~一五頁。

(36) 高旺『内蒙古長城史話』(内蒙古人民出版社、一九九一年)、一九〇頁。

(37) 『史記』秦始皇本紀秦始皇三十三年条「又使蒙恬渡河、取高闕・陰山・北假中、築亭障、以逐戎人」、『史記』蒙恬列伝「築長城、因地形、用制險塞」、『史記』匈奴列伝「始皇帝使蒙恬將三十萬之衆北擊胡、因河爲塞、因邊山險谿谷可繕者治之」、『漢書』匈奴伝「(武帝遣車騎將軍衛青)出雲中以西……於是漢遂取河南地、築朔方、復繕故秦時蒙恬所爲塞、因河而爲固」等々。

(38) 『固陽秦長城』、第三七頁。高旺『内蒙古長城史話』、第一九〇頁。

(39) 『固陽秦長城』、第一七頁~一八頁。

(40) 水間大輔・柿沼陽平・楯身智志・川村潮「居延漢代烽燧・城邑遺址等踏査記」(『長江流域文化研究所年報』第五号、二〇〇七年)。

(41) 蓋山林『陰山岩画』（文物出版社、一九八六年）、蓋山林『烏蘭察布岩画』（文物出版社、一九八九年）、『固陽秦長城』、第五〇頁～六〇頁。
(42) 『固陽秦長城』、第一〇頁、第六一～九六頁。
(43) 「胡服騎射」に関しては、柿沼陽平「戦国趙武霊王の諸改革」（『日本秦漢史研究』第十三号、二〇一三年）等参照。
(44) 長城の目的に関しては諸説ある。柿沼陽平「戦国趙武霊王の諸改革」参照。
(45) 李六生「包頭疆域建置沿革――从戦国至清末」は三房帳城址＝漢代宜梁県城、王龍耿「秦漢時期的包頭」（『包頭史料薈要』第一輯、一九八〇年）は戦国趙雲中郡九原県城、王大方「漢武帝陰山之役和朔方・五原郡的屯墾開発」（『内蒙古文物考古』一九九七年第二期）は漢代五原郡九原県城とする。
(46) 戦国趙期の「九原」が郡か県かは『史記』等に記載なく、従来は清・全祖望『漢書地理志稽疑』以来県とする説が有力であった。だが史念海「論秦九原郡始置的年代」（『中国歴史地理論叢』一九九三年第二輯）、陳倉「戦国趙九原郡補説」（『中国歴史地理論叢』一九九四年）は戦国趙の九原を郡とする。
(47) 高旺『内蒙古長城史話』。
(48) 現代包頭の方言については、野村正良「張家口方言及び包頭方言に於ける声類」（『名古屋大学文学部研究論集』第一〇号、一九五五年）等参照。
(49) 内蒙古文物工作隊編『内蒙古文物工作』（第七冊、一九六五年）、王龍耿「秦漢時期的包頭」（『包頭史料薈要』第一輯、一九八〇年）。
(50) 李六生「包頭疆域建置沿革――从戦国至清末」、李逸友「論内蒙古文物考古」（『内蒙古文物考古文集』第一輯、中国大百科全書出版社、一九九四年）、王大方「漢武帝陰山之役和朔方・五原郡的屯墾開発」。なお白文華「麻池村考察記」（『包頭史料薈要』第三輯、一九八〇年）によれば、酈道元『水経注』・『漢書』地理志・『中国歴史地図集』を対照すると、その説が浮上するらしい。
(51) 李逸友「漢光禄城的考察」所引の説。
(52) 卜昭文「靳之林徒歩考察秦直道記」（『瞭望』一九八四年第四三期）の靳之林の言。
(53) 包頭市文物管理処・達茂旗文物管理所「包頭境内的戦国秦漢長城与古城」（『内蒙古文物考古』二〇〇〇年第一期）。
(54) 白文華「麻池村考察記」（『包頭史料薈要』第三輯、一九八〇年）。
(55) 白文華「麻池村考察記」。
(56) 王龍耿「秦漢時期的包頭」（『包頭史料薈要』第一輯、一九八〇年）。
(57) 『内蒙古中南部漢代墓葬』。なお戦国以前の内蒙古自治区長城付近の遺物に関しては江上波夫・水野清一『内蒙古・長城地帯（東方考古学叢刊乙種第一冊）』（東亜考古学会、一九三五年）等も参照されたい。
(58) 何林「包頭地区的古銭幣」（『包頭史料薈要』第七輯、一九八二年）。
(59) 張秀峰「対包頭出土戦国布幣的幾点認識」（『内蒙古金融研究』二〇〇二年第一期）。なお張氏は「安陽」銘布幣を趙国青銅貨幣だと断定するが、貨幣は本質的に動きまわるもので、当該貨幣が「戦国趙九原県」故地から出土したことを根拠にそう断定できるかは検討の余地がある。
(60) 李逸友「包頭市窩爾吐壕発見安陽布范」（『文物』一九五九年第四期）。
(61) 李逸友「包頭市窩爾吐壕発見安陽布范」。

図の出典一覧

[図1] 和林格爾県文物保護管理所編刊『和林格爾県文物志』（一九八八年）九一頁より作成
[図2] 内蒙古文物考古研究所「内蒙古和林格爾県土城子古城発掘報

告」（『考古』編輯部編『考古学集刊』第六集、中国社会科学出版社、一九八九年）

［図3］李興盛「内蒙古卓資県三道営古城調査」（『考古』一九九二年第五期）

［図4］図3に同じ

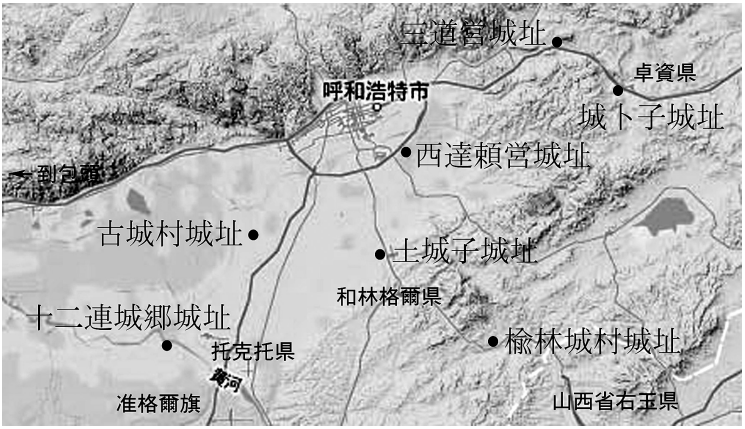
［図5］内蒙古師範大学歴史文化学院考古文博系・内蒙古自治区文物考古研究所「卓資県城卜子古城遺址二〇一〇年発掘簡報」（『草原文物』二〇一一年第一期）

［図6］内蒙古自治区文物考古研究所・托克托県博物館「托克托県古城村古城遺址発掘報告」（内蒙古自治区文物考古研究所編『内蒙古文物考古文集』第三輯、科学出版社、二〇〇四年）

［図7］李作智「隋唐勝州榆林城的発現」（『文物』一九七六年第二期）

（水間大輔：厦門大学歴史学系博士後）
（柿沼陽平：早稲田大学文学学術院助教）

［付注］本稿は、柿沼陽平の平成24年度科学研究費補助金（研究課題「中国前漢後半期から王莽期の貨幣経済史に関する研究」、番号24820055）による研究成果の一部である。



［地図１］フフホト関連地図

［地図２］包頭関連地図